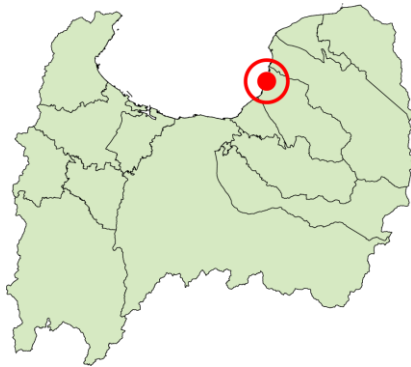




魚津地区について

魚津地区は、富山県の東部に位置し、北東は布施川を境に黒部市と、南西は早月川を隔てて滑川市・上市町と接している。北西には富山湾が広がり、「蟹気楼・埋没林・ほたるいか」が当地区の三大奇観として有名である。

地区の南東部は、北アルプスに連なる山岳地帯で、これらの山々を源として、いくつもの河川が富山湾に注いでいる。海岸線は比較的平坦なもの、海中では海底が深層まで落ち込んでいるため、魚津の港は昔から良港とされ、海底の湧水に恵まれた好漁場として広く知られている。



組織の設立および背景

当地区では、藻場に恵まれ、かつてから採貝・採藻漁業が営まれてきた。しかし、平成15年ころより、「藻場が減少し、テングサやサザエ、アワビなど、これまで漁獲していた磯根資源が獲れなくなってきた」と漁業者から心配の声が上がるようになってきた。一方で、これまで獲れていなかったサワラやケンサキイカも獲れるようになり、これらの出来事は漁場環境の変化を感じさせるものであった。

また、地区の特徴として、冬季には波浪条件が厳しいことや、山岳部から流れ出る河川からは増水時に砂が流入することが挙げられ、減少した藻場の回復を妨げる要因となっていた。

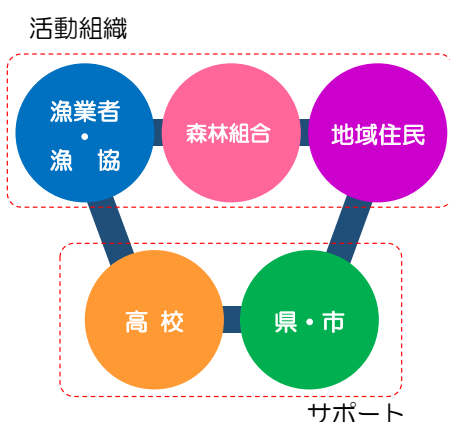
そこで、これらに危機感を募らせた漁業者や漁協が中心となって「魚津市漁場環境保全会」を平成21年度に結成し、漁場環境の回復を目的とした取組を開始した。

環境が変化し、衰退した藻場

活動方針と体制

当会では、山から海までを大きな水環境としてとらえ、豊かな山が豊かな海を育むという考えのもと、上流域における植樹活動を中心とした活動を実施している。そのほか、沿岸域における藻場の保全活動や魚介類の種苗放流などをあわせて行っている。

組織の体制は、漁業者や漁協を主体に、森林組合や地域住民から構成しており、滑川高等学校や県の水産研究所などのサポートを受けながら活動を進めている。



植樹活動を通じて、山と海のつながりを伝える

植樹活動は、漁業者や水産研究所から「森を育てたら、海も豊かになる」という話があったことをきっかけに、森林組合や滑川高校に声をかけて活動を開始した。

活動は、魚津市を流れる片貝川上流で実施しており、毎年、6～9月頃に50本ほどの苗木を植樹している。主にヤマザクラなどの広葉樹を植えることが多く、これまでの植樹本数の合計は1,700本を超えた。

滑川高校との植樹活動は平成23年から始まり、今では高校の恒例行事として毎年開催している。活動時には、山と海のつながりや植樹活動の意義を説明し、開墾、肥料分け、植樹まで生徒が自発的な意識で活動を行えるよう配慮している。近年では、高校生自らが廃棄する魚から魚粉肥料を作成するようになり、植樹活動の際に利用している。



高校生による植樹活動



作成中の魚粉肥料

沿岸域での保全活動

(1) 海藻種苗ロープの設置

衰退した藻場の再生を図るため、11月頃にワカメやアカモク、クロモ(岩モズク)などの種苗を取り付けたロープを海中に設置し、翌春の種の供給を促進している。



アカモクの種苗ロープ

(2) 魚介類の種苗放流

クロダイやヒラメの種苗放流を毎年行っており、コロナ禍前には普及啓発活動を兼ねて地元保育園と共に放流を実施していた。

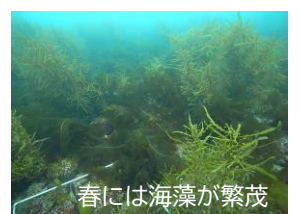
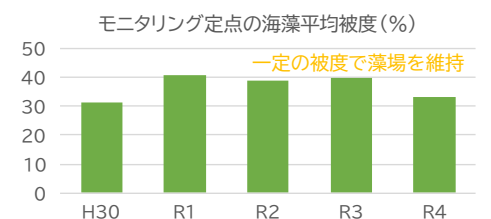
活動の成果と今後の方針

植樹活動や海藻種苗ロープの設置の取組を行った結果、一定の被度で藻場を維持することができた。春にはワカメや小型海藻が主体の春藻場が形成されており、夏や秋にも多年生のホンダワラ類が残存した。特に早春においては、被度が80%を超える地点も確認された。

また近年では、活動を知った地元の企業が植樹活動や魚介類の種苗放流に参加する機会



企業参加の種苗放流



春には海藻が繁茂

が生まれており、これまでの取組みが一般市民への普及啓発につながった成果が現れ始めている。今後もこれらの活動を継続するとともに、より効果的な藻場保全の取組を検討していきたい。